ブーゲンビル島派遣の元高砂義勇隊員・六〇年目の証言

前　圭一

I. ウイラン・シマオさんの証言

二〇〇五年二月二十二日、三月一日　台北市内にて

聞き取り…前　圭一

本　名　ウイラン・シマオ
日本名　中野　宇吉
中国名　顔林　石永
一九二三年生まれ

【生まれ】

大正十二年（一九二三）一月二七日に台北州羅東郷南山（現宜蘭県大同郷南山）に生まれた。当時は登記がなくて、戸籍では大正十三年（一九二四）一月二十七日となっている。山地での名前はウイラン・シマオ。日本

統治時代の戸籍は中野宇吉。現在、顔林石永。あだ名はマチ牧師。

部落は以前ピアナン社といい、南湖大山と次高山（雪山）の間を流れる川の流れの平らな所にある。南山部落の元々の出発は南投県。石から生まれたという伝説がある。お父さんとおじいさんはそこから出た。

ウィランさんが生まれた南山部落

【兄弟】

私の兄弟は五人いた。私と兄が兵隊に行った。兄は兵隊から帰り、五十二歳で死んだ。

私は五人の兄弟の内の三番目。兄弟は女、男、私、弟、弟だった。私たちの兄弟は日本統治時代すばらしい家庭であった。長女は助産婦、兄さんは青年団長で、部落の中心。私は青年団の分隊長だった。弟は農業指導者で、農業学校をでた。下の弟はまだ小さい時、日本統治時代最後の六年生だった。南山には当時公学校があった。当時は農業を継ぐか勉強するかだった。

【南山の昔の生活】

山の豚（※猪のこと）は本当にきれいで肉もおいしい。生で食べることできる。今は生で食べるのはあぶない。当時は生で食べた。大きい豚一頭は十五円もしない。靴は安いので二十五銭した。

家に仕事できる人いない時は一銭でも二銭でも集めた。その時の金は一日の労賃が一番いい仕事をして七十銭。我々みたいのは二十五銭、四十銭、五十銭といったところ。その時の金は大きい。一円で今の豚肉五斤買える。七円で一人の奥さんもらえた。部落で一番の金持は六十円。何年で集めたのか。

昔は仕事が毎日あるのとは違う。造林伐採の仕事があった。各部落がはじめ一週間山に行って仕事をする。警察派出所のまわりの仕事で、排出口や庭造りなどいろいろあったが、あれは一日いくらもない。だから、庭造る日程が何日もかかる。橋を造る時も同じだ。

材料は山から運ぶ。大人一日七十銭。まじめな人で高かったら七十五銭。八十銭はでない。兄さんは七十五銭で、私は四十五銭だった。植林する場所はだいたい三十分ぐらい離れていた。当時は道が悪かったからそれだけ時間がかかった。当時は蛮刀で作業した。日本が入ってきてから鍬やのこぎりが使えるようになった。

平地から南山まで二日かかった。道がない。警察官が赴任してくる時は、山の人が宜蘭まで五、六人行って警察の荷物、食べ物みんな運んだ。途中は親戚の家に泊まった。大変だった。光復（※日本敗戦）後、トラックはなく、歩くだけだった。自分で植えて収穫した米があるので、宜蘭に行って塩だけあればよい。二十キロぐらい担ぐ。それで一日七十銭。いい日本人もいて、飯や酒も少し出してくれた。悪い人は全然だったが、それは人による。

南山は海抜一八〇〇メートルぐらい。南湖大山のふもと。冬は寒いが夏は気持よい。ふとん二、三枚かぶらないと寒い。しかし山の人は慣れている。

山の人はお客が来たら立派にもてなししないと不幸になる。旅人をもてなすと、後で福がくる。けちけちすると貧乏になる。これはお父さんから子供へと伝えている。

【小学校時代の教育】

小さい頃は、六歳から公学校に入る。部落の学校は日本人の三人の巡査と衛生が先生を務めた。警丁は台湾人で、南山出身者は、父が台湾人で母は山の人だった。でたらめに選ばない。区域によって進級する。

精神修養、教育勅語が中心。私たち、初めは苦しかった。学校に来ない者はよほど厳しくやられた。学校では日本語教える。日本語しゃべらないと絶対許さない。我々が山の言葉を話したらつかまえる。派出所に連れていって、一日仕事させる。こうして絶対日本語を覚えるようにさせた。

一番重くきつかったのはあいうえおと算数。朝の時間は遅いとなぐられる。ずうっと小さい頃から裸足。日本が来てから「靴買いなさい」とすすめられた。

暗記出来ない子は相当なぐられた。やっぱりたたかれて厳しかったが、最後に出来たから日本は悪くない。四年から六年まで忠実を教えられた。確実、忠実、そして日本の文化を守ること。先生の教えは本当に厳しかった。

天皇は一人。天皇陛下の命令、そして親のために死ぬ。台湾でも天皇陛下の命令と召集した。天皇は私たちの神、天にある。私の時代は今上天皇。天皇陛下の為、一つの天皇は一つの国。

日本で一番大きく偉い人は天皇で、天照大神の子孫。天皇陛下の命令で全国民が動く。天皇が平安を与えられる。天皇は銃後のために心配され、食べるもの、生活もすべては天皇が銃後を守っている。

天照大神の子孫が天から地上に降りてくるという話には疑問は感じなかった。反対すると殴られる。みんな、あーそうかそうかと不思議に思わなかった。今考えてみると、天から降りるのは当たり前。それは人間は天から与えられたものだから。

日本は山の人に指導して歌を教えた。それで、戦争に行くやつは忘れないで口にした。

”天皇陛下万歳と　残した郷里が忘らりょか
戦するには兼ねてより　ぐっと忍んだ草枕
父にーーーーー”
だいぶ忘れた。「戦地に誓う歌」
”恩賜の煙草をいただいて　明日は死ぬぞと決めたぞは
淑女と男は泣くでない
しっかりおやりと母上に　靖国神社の身は頼り
行くよ男は泣くでない　次々進んだ真珠湾”
”我ら高砂義勇隊”、あれもある。こういう歌もある。ラバウルに集結した時に歌った歌。「敵がやれば我もやる」という歌。土曜日の晩、たばこに純粋の酒一瓶を五人で飲んで、意気があがった。
”あいつがやれば僕もやる　僕はますます元気だよ
見渡す限り今日までも　敵のかぶとの弾の痕”
酒の力で、銃後のため、国のために私たち隣近所、やるぞと盛り上がった。
教育勅語は暗記した。一人ひとり暗記しないと厳しかったよ、毎朝。難しいし長い。今も少しいえるが、大分忘れた。軍人勅諭も覚えるのは大変だった。
昔は帝国主義で、天皇陛下のために、自分の国をよく守る。他の国を取り、アジアが一つになる。台湾は日本の国になった。あれと同じだ。日本は世界を守る。日独伊三国同盟が世界を守る、そう教師ははっきり言った。
戦争の時、銃後のために、国のために取るという意味。日本は少ないから、私たちは絶対負けない、負け

るといわない、そういう精神をたたきこまれた。

教科書で印象に残っているのは東郷平八郎と侍。東郷平八郎は一番偉い人。世界を守る軍艦の中で、一番上に上がり、撃ちなさいと合図した。

桃太郎さんは、よく人を育てて、猿・犬・雉によく教えて敵をやっつける話。侍は昔の一番すべての精神である武士道。どんなことをしても、何があっても侍はやるときはやるという精神。

四年生ではたくさんあったがだいぶ忘れた。山田の案山子。これは日本の国を守るという意味。米とか食べないように守る。からすがどうして笑うのか先生に聞いたら、案山子は動かないが守っているとのことだった。

しかし、一番私が感じたのは日本の女性の礼儀。座ってこうして、「ありがとうございました」。自分の夫、父に対してこれだけは親孝行だなあと、教えられたことに対して感心した。

【霧社事件（一九三〇年）について】

その時は私たち高砂族は一つのまとまりがなかった。山と山が敵対していた。私たちと宜蘭、花蓮とやったことがある。全然連絡取れなかった。

霧社事件は自分が七歳の時で、うちの部落を出発して山の宜蘭の人もいっしょに行った。いっしょにやろうとしたところ、もう終わっていたようだ。この話を聞けば、問題は日本の警察のきまりが厳しいことに不満があったようだ。一人の娘が山にもらうつもりで結婚することになっていたが、日本の警察が関係を持った、そういう問題だという話を聞いている。

部落から霧社にいったのは、日本人といっしょにやろうと思ったかもしれないが、どちらかわからない。

戦争している時、宜蘭からきた日本の警察と七、八人いっしょだった。着いた時、戦争は終わっていた。警部補がうその話をして、理解してよく終わった。

【日本への感謝】

我々は日本に感謝している。道もないし、習慣もソロモン群島にいった時、女は木の葉っぱかぶってたが、でもここの山は違う。上がる時、寝る時、女は昔の習慣で腰巻だった。それをよい習慣にしたのが日本。

【青年団】

青年団は男子と女子があった。一つの国の兵隊みたいだった。部落の守りとして、何か起こったら行動するのが役目。

青年団員は十六歳から四十歳まで。青年になったら精神修養する。期限が長い。一人が三回ぐらい一～二ヶ月講習を受ける。農業・訓練・礼儀の仕方・着物の着方・部落の衛生。部落をきれいにするのは青年団の仕事。二週間に一回清掃した。食べ残し、ごみは絶対捨てない。ごみ捨て場をちゃんと作った。人のまわりにつばをしてはいけない。

私は当時班長だった。兄さんは分団長。毎朝一週間一回訓練。体操、歩き方、前へ進め、まわれ右、右向け右。一週間に一回は軍事訓練。物事のできるやつは班長になれるが、精神の弱いやつは班長、分団長になれない。班長や分団長になる試験を受ける。警察学校で試験があった。各部落に警察官が十人いた。部長が一人、巡査が三人、警丁四人、衛生二人。

班長の試験は、科目は日本語。「あなたは○○ですか」この○○に入れる。算数、それに「あ」から「ん」

までの暗記もあった。それ以外に物売りの問題。「お母さんが五十円あげて店に行って、豚肉一斤二十円です。二斤半買って残りいくらですか」　日本語以外に社会があった。人間と人間とのつきあい、礼儀を教える科目。「先生はどなたですか」「学校の校長は誰ですか」これも自分の学校の校長先生を書かないとダメ。「台湾で一番偉い人はどなたですか」台湾総督のこと。

一年から六年までそれぞれ試験違った。大きくなれば大きな問題が出た。同じ試験で、一〇〇点、九十点、八十点と並べる。その中で一〇〇点は分団長。

私の兄さんは四、五回取った。兄さんが五年生で卒業した時、兄さんと試験受けた。部落の青年団で優秀だった。物事が言えるし、強い人気があったし、号令かける時、上向け上、こういう号令のいい声を出す。動作、体格、走るのも強い。

一番大きい問題は、年一回他の部落と三個部落で一個方面として部隊長が集めた。その時は厳しかった。分団長、班長一人ひとりの試験があった。三〇〇何人全員の試験もあった。点悪い人はよくわかるまで暗記させられた。あこの試験は本当に難しかった。受験した三個部落の中の一番の人を日本の家に預ける。

晩になると、老人学校で老人に教える。私たち班長が教えて、班員が老人に教えた。「これが〇〇です」「あなたはどなたですか」。みんな日本精神持てるように、帝国主義ですよ。

「おはようございます」あいさつの言葉が厳しかった。今は言えるが、初め勉強している時は苦しかった。算数　二＋三＋四＋五――――この暗算。二、三が六。あの九九覚えないと班長の資格ない。四年生から上になると、頭がよかった。

班長に手当はなかった。しかし、一週間に一回座談会があった。酒がでて、お菓子をいっしょに食べる。警察官も同席。夜、一人ひとりが意見や質問をして、班長に何か苦しい所あるか、何か気になる所あるか聞

く。班長は試験で落ちると交代。経験ある人は必ず受ける。私も班長だった後、ずっと指導者で経験あって、最後には部落の村長にもなった。

兄さんは私をなぐった。厳しい、命令する、やってくれ。与えられたもの、上の命令には反対することができない。兄さんに反対したら、一ヶ月つかまえて派出所の中の牢屋に入れられた。私が分団長とすると、班長が報告してきたらつかまえる。精神修養は、当時の青年と今の青年を比べると相当違う。

【「サヨンの鐘」の思い出】

サヨンは宜蘭県の山の人だった。蘇澳方面。恩師の先生が召集を受けて戦場にいく。サヨンは見送りの時、暴風を受けて転落して亡くなった。本当にいい日本と高砂族の記念碑がある。

〝嵐吹きまく　峰ふもと　流れ危うき　丸木橋
渡るは誰ぞ　うるわし乙女　紅きくちびる　ああサヨン
晴れの戦に　出でたもう　雄々しき師の君　なつかしや
担う荷物に　歌さえ朗ら　雨は降る降る　ああサヨン〟

あの日本人の先生も本当にいい人。召集されて、蕃社の学校の先生だった。あの先生が生きているかわからない。サヨンの兄さんも戦争に行った。帰らずに死んだ。あの映画（「サヨンの鐘」）も見た。本当の映画よ。

日本の歌も絶対忘れない。（「東京音頭」）

【高砂義勇隊への志願】

私たちも日本の学校に入って卒業し、日本語教育されて、少し頭よくなった。

兄さんは部落の指導者として有名だったですよ。私は青年団の分隊長でした。支那事変の戦争があった時、警察が「国を守るために行きたい者は精神力があるなら志願せよ」といった。兄さんは自分が行くつもりだったが、聞きにいくと警察は許さなかった。兄が行くと指導者がまずくなると許さなかった。

私が十七歳の時で、その当時日本の警察は毎朝六時半に起きて訓練させていた。当時日本と支那はますます厳しくなっていた。手柄たてた原住民、これが心から好きな国のためだから、国のために名誉がほしいという気持だった。

訓練が終わって八時ごろ別れて、お父さんが畑に行こうと命令したので、弟、兄さんと四人で行くことになったが、私は「先に行ってください、便所に行くから」とごまかした。畑は遠い所にあり、一キロぐらいはなれていた。そして私は考えた。よし、ここにずっとおると兄さんが兵隊にいったら苦しいから、国のために自分がやろうと決心した。指を切って日の丸を書いて、父さん兄さんより先に警察に行った。警察に行くと、「ええ、あなた出来ますか、簡単ではないぞ」といわれたが、「出来ます。私ファイトあります」と答えた。「まだ早いね」「いや早くないです。私行きます」それから日の丸を台湾総督府の理蕃課に送った。

その後、兄さん父さんについていった。「どうしてたんだ」「便所してた」。伐採作業をした後、昼飯の時、「手、何した。伐採できない。あぶないじゃないか」と問い詰められた。

晩、会議の時に兄さんが警察の派出所にいった所、「はい中野、弟が志願に来たよ」といわれ、「冗談じゃないよ、そんな弟はまだ小さい、私行くよ」と兄は言った。そこに警部補、警ら部長がいたが、「これは弟が行かないとだめよ。兄さん行かないで、弟行くならそれでよい」。兄さんは、「あれは戦争できないし、戦

争に行くったら死ぬよ。命令消してください」と頼んだ。

理蕃課の命令が三日目に来た。兄さんは相当心配した。兄さんは「これ、冗談じゃないよ」と私をたたいた。

命令でた後、一ヶ月で召集。一ヶ月の間に第一回志願兵はコレヒドールに行き、あの連中が帰ってきて、ホ〜。五人が村から出ていって三人が帰ってきた。二名がやられた。その時、毎朝毎朝訓練で、帰ってきた人達が「違うぞ」と命令する。「訓練ダメ。前へ力をいれて」と教える。日本の兵隊行ったら手柄立てて有名になると喜んだ。

第二回目も日本はよく宣伝した。負けては困る、男は男らしくと銃後の宣伝をした。

十七歳で戦争に行った。その時は喜んだ。死ぬという覚悟でいって帰るということ、戦争だから手柄を立てて帰ってくるという精神を持った。国のために戦争して勝たなければいけない、銃後のために命をかけて行こうという気持だった。それで戦争にいった。

日本が台湾を支配したのは五十年。小さい頃から教育して、国語も日本語、国は日本。自分の国を守ることを信じて、日本のために、国のために活躍しないとダメだと、勝って攻めていこうという気持になった。

召集を受けて、部落から出征していった時は見送りはなかった。朝三時ごろ学生・青年集めて、その晩に知らせた。その時、お父さんは畑にいて、私が朝行くってわからない。村の人にも知らせない。スパイが怖いから。

【高雄滞在の時、つきあった女性のこと】

召集を受けて、高雄にいた時のこと。二ヶ月ぐらい滞在した。日本の門司からきた女学生が気に入った。

彼女の父が高雄で仕事していた。砂糖会社か何かだった。訓練が終わったら、土曜日の午後、彼女が兄さん、兄さんと慕ってくれて、知り合って友達になった。

南方に出発する前に彼女は妊娠した。「兄さん、がんばってください」と、一、二年は慰問袋を送ってくれ、ソロモンまで届いた。男の子で、写真では大きくなっていた。飛行機も船も配達しなくなって、戦争が終わってから後はどうなったかわからない。戦争が終ってみんなアメリカに取られたので、写真もない。彼女はマキノミエコといった。九州の牧師にも調べてくださいと頼んだが、消息はわかっていない。

【高砂義勇隊の部隊編成】

戦争にいって初めに高雄で弾の撃ち方、手榴弾の使い方、武器の持ち方、爆弾の扱い方など訓練された。それから昭和十七年十月に高雄を出港。はじめにコレヒドールに寄って、マニラ、パラオ、そしてラバウルに二ヶ月かかって集結した。上の命令がきて、ソロモンへの突撃準備に入った。

第三回高砂義勇隊は、シゲムラ大隊長の下に六〇〇名ぐらい。高砂義勇隊では、警官の警部補が中隊長になった。警察部長が小隊長だった。中隊は、新竹・宜蘭・台北州を一つにした部隊で大きい。スギムラ中隊長は台北を代表してきた。総督府の中の警察で、相当経験ある人。苗栗・新竹・宜蘭・台南を一つにまとめた隊長だった。自分が二十一歳の時、あの中隊長は四十五歳で、めったに見ることもなかった。

高砂義勇隊をとってもかわいがってくれた。特別に土曜日で、戦争の状態がいい時に配給をくれた。缶詰・米・一升瓶の酒をかためていっしょにくれる。こんな時は山の人が作った歌をうたった。

"大隊長はおいで　いいよ　さあ乾杯"　大隊長が来た、さあ乾杯しようという歌。山の人、若いですよ。一番いい酒、煙草を呑んで気分がいい。熊本の連中は飲んだら暴れる。

「我ら高砂義勇隊」を歌ったが、熊本部隊（第六師団）は日本の歌唄った。
みんな銃後のために、国のために、日本人民のために。手紙きたら、彼女の手紙、みんな拍手。

〝船はゆくゆく歓呼の声で　ラバウル通いの船が着く
今日も来たかよ　故郷の便り　うなずく今も待つ遠い？〟

これは私が一人の日本人（高雄の彼女）のために歌った歌。
一中隊は三個小隊だった。自分は、第三中隊第一小隊第六分隊の所属で、高砂義勇隊には従軍徽章のようなものはなかったが、自分は軍曹の資格だった。第一小隊は一〇〇何人、第六分隊は二十四人だった。小隊長はサク、副隊長はタナカという名前だった。サク小隊長は宜蘭の山のそばで警察官になった。高砂義勇隊があだ名でサクと付けた。
日本で一番力のあるのは熊本部隊で、台湾では高砂義勇隊だった。台湾でも平地民はダメだった。

【ソロモン群島の島への上陸】

ラバウルから私たちは第二回目に出航。十四隻の船の一つに乗った。前もって米軍の基地作られていたので、島をまわった。米軍の攻撃で、海の中で沈んで、最後に日本の船二隻が上陸した。あとはみんな撃沈した。十四隻の輸送船は爆弾を落とされて大破した。米軍の飛行機は雲みたいよ。日本の飛行機がやられた。自分で自分やられていた。B二十九は大砲が当たっても壊れない。
トンネルに入る時、爆弾落ちて進めなかった。海に飛び込んで、荷物も鉄砲と蛮刀だけ。二時四十分、米軍の荒鷲飛行機（水上飛行機）が降りてきて、人間の頭をパッパッパッと切り倒した。みんな血だらけの人間で海の中でひどかった。高砂義勇隊員の乗った船は大爆発して大破した。もう飛び込んでみんな何千人と、

煙いっぱい、海は血、人間の顔が何万人。私たち飛び込め飛び込めといった時、ぱっとむこうの飛行機は三時になったら帰っていった。

暗くなって、輸送船に隠れた。見えない所に日本の潜水艦が来て、高砂義勇隊乗れ、乗れと。縄につかまって潜水艦の中に入った。どこに上陸するのかわからない。夜だから見えない。

島まで近いよ。朝八時ごろ上陸したら、向こうも大砲を爆竹みたいに撃ってくる。小さい輸送船に乗って上陸。高砂義勇隊と熊本六師団、船やらなかったら上陸大変だった。

ソロモン群島の島に上陸した。ガダルカナルに玉砕に行く予定だった。ガダルカナルのすぐそばの島だったが、もう長いから島の名前は忘れた。上陸した場所は島で一番高い山の近くのタルシシという所の海岸に上陸。朝八時に上陸した時、米軍の飛行機が爆弾を落とした。上陸した時、たくさん死んだ。戦友も〝お母さん、バンザイ〟といって死んでいった。

アメリカの飛行機に私もやられた。本当に当たった。日本から与えられたお守り通して、特に高砂族は神様守ってくれる。ここら（※額・ひたい）あたりから弾がすれていった。今も傷跡がある。

傷大きいよ。これみんな血だして、目みえないし、骨こわれた。だいたい一週間ぐらいでなおったが、治療簡単じゃなかった。入院もしないし、入院場所もなかった。神が守ってくれた。出発する時、お父さんがこう言った。「戦争にいったら必ず勝って帰ってくるよ。お前は正直だし、人をいじめたことがないから」

日本も海岸に上陸した。アメリカ、黒んぼ、みんなやられた。日本の熊本部隊と私たち合流した。上陸してかわいそうだった。その晩激しい音もない。みんな死んだ。高砂義勇隊が乗った二隻は大破した。それで、小さい船に乗って上陸した。六〇〇名ぐらいが上陸した。乗り組んでいたのは、熊本部隊が一〇〇名ぐらいで、五〇〇名は高砂義勇隊だった。一隻は島の向こう側に行った。最初は一隻に約八〇〇人以上乗っていた。

自分で守るだけだった。勇ましかった。戦争に行って本当に苦労した。たくさんの戦争を経験した。

米軍は後から上陸してきた。私たちにぶつかったのは少ない。黒人兵は戦争がうまい。十何万人とみんな撃滅された。上陸しないままにみんな死んだ。高砂義勇隊もみんな死んだ。

その後半年以上日本も景気悪かった。ソロモンのタルシシで大隊長がこんな話をした。日本人の参謀長がアメリカのスパイをしたので負けた。（彼は）つかまえられた。つかまえて、参謀長の家に米の藁を投げた。一年半ぐらいして糧秣が着かない前にやられた。

【島上陸後の状況】

上陸したら戦争。山の中で塹壕を掘って、海岸線で戦争した。一番激しかったのはソロモンで一番大きな川で、日本人が何人撃滅したか。四〇〇人から八〇〇人ぐらいか。広い川幅で、一〇〇〇メートルはあったか。それを渡るとなかなか進みきれない。夜中でないと渡れない。夜になると、蛍を一個つかまえて一人その合図で進む。相当苦労した。渡ると後は退散することもできなかった。もう移動して一ヶ月、半月間と防空壕。昼はご飯炊かない。煙出すと爆弾が落とされる。夜も照明弾。光がぱあっと。よく防空壕に覆いして、絶対に明かりつけない。

気候は、冷たさも暑さもない。気温が変わらない。夜も変わらない。雨の後は晴れる。

もうずうっとおると怖くない。飛行機来てももう自分で判断して案山子みたいに音聞いたらちょっと仕事して逃げる。勝つもないし、負けるもない。午後に玉砕命令やった。

B29来たら爆弾落として、一キロ四方トラックも通れない状態。向かいの山も禿山。日本は経済の問題で負けたが、精神力では負けない。

【食糧の補給途絶】

十七軍の部隊が入ったけどダメだった。熊本師団がやろうとしても配給の食物がない。島に上陸してそのまま四年半。ジャングルで食べ物もない。ラバウルとニューギニアの間で、アメリカの飛行機に日本の輸送船がやられて、一、二年は何もない状態だった。塹壕掘って、食べるものは山の中で、草・木の実・果物、もう自給よ。最初は食料あったが、二年以上補給が途絶えた。

一年目は主にジャングルのもの。主な食べ物は実のなる椰子。さつまいもみたいなのが現地の山に実がなって、おいしかったですよ。みんな草・木の実・果物・野生のバナナ・パイナップル・パパイア・シャカ・萱の芽といろいろある。野生多いから登って食べる。

そのころは何でもおいしい。猪・ナマケモノ・大きいとかげ・ムササビ（台湾とは色が違う）・蛇。蛇食べたら怪我治る。向こうの猪たくさんいる。山の人経験あるから、わなかけて取る。弾の配給も無効にしないために撃たない。よほど経験ないと取れない。二日に一回ぐらいか。日本人に分けてあげた。でんぷんみたいのと食べると猪（山豚）がとってもおいしい。台湾に比べたら種類はたくさんあるが、食べ物少ない。間違って食べたら死ぬ。自分で研究して食べる。

補給が途絶えた後は、芋を作ったり、畑を作った。一年以上畑作ったりして過ごした。畑では、いも・さつまいも・かぼちゃ・野菜など作った。野菜は白菜など早く食べられる野菜がよく育った。すべて野菜とかさつまいもの生育よかった。昼間、飛行機いない時は伐採した。木の太いのも根元は弱かった。その後アメリカもあまり爆撃しなくなった。見られたらみんなやられる。

土人の畑の種を拾って植えた。土人が栽培していたマイマイの芋。タロイモみたいなもので、この茎がやわらかくておいしい。たばこも何もなかった。

日本の兵隊はあれ食べて、急ななれない生活で死ぬやつがいた。主に偉い人ね。タケムラ・タナカ大隊長、少佐、中佐、もう戦争にいったらあれもえらそうもないしダメよ、力ない。一番苦しい思いをしたのは我々。食べるものがなくて、戦争の中では人間の肉も食べた。

水の確保も大変だった。藤や桂から水を取った。五個の水を鉄かぶとにためる。一日で半分ぐらい。これを水筒に詰める。

【病気と治療】

行った時は六〇〇名ぐらいだったが、帰る時は一〇〇何名ぐらい。私の部隊は二十四人で十何人残ったが、あとはみんな死んだ。私はその時分隊長だった。赤痢・熱帯潰瘍・食べ物のためになくなった。

横浜の出身のタケナカ中隊長も死ぬつもりだった。彼は弱かった。私よく肉あげた。山の中のおいしいものあげた。家族だから。赤痢になり、尻が血ばかりだった。赤痢に罹ったらみんな死んだ。

日本人を助けたよ。タケナカ中隊長は別れの時、「高砂義勇隊にお世話になった。心配しないで、日本また会いますから、がんばってください」といったが、それっきりだった。

私も赤痢になった。マラリアもひどかった。熱帯潰瘍は台湾までついてきて、台湾の人に移した。薬もなかった。私が山で自分で薬を研究した。赤痢はソロモンにいた時に治った。木の皮を食べたら、ウワー苦い。パーと吐いたら水呑んだあともその味が残る。熊の胆のうよりもっと苦い。症状の重いものは死んだ。一〇〇人ぐらい。南山にいた時、あの皮が腹の痛みに効くと知っていたが、ソロモンに行った時あった。それを取っておいて、助けた。台湾のと同じような木だが、葉っぱは違う。木の皮はそっくり。かんだら味はそっくり同じ。日本人も、あれもこれも食べないやつは死んだ。死ぬのは早い。すぐ目がぱっと。もう血ばっか

り。人間の顔も変わる。青々として、罹ってから二週間かからない。ある者は二週間以上。木の皮でだいぶ助かった。日本人も助けた。何でも発明するのも助けるのも山の人。日本人は山で食べたことがない。山の人は本当にすばらしい。

【山本五十六連合艦隊司令長官の死】

私、山本五十六を埋めたよ。山本元帥の乗った飛行機は護衛機四機で八時十分出発。ロッキードというアメリカの飛行機がサーとやってきて上空で一回、二回――――撃墜して逃げた。二機は帰った。二〇〇メートルも降りてきた。オワー、私たちの待っている所五〇〇メートルの所だった。山本元帥は軍刀を握ったままで死んでいた。走っていってすぐ水かけた。近かったよ。私たちが埋めた。埋める時は、高砂義勇隊の七、八人、日本兵は二十人から三十人ぐらいかな。おそらく写真もある。負けたからアメリカ軍に時計とかみんな取られて、裸になった。

本当に埋めたのは高砂義勇隊だった。死体を燃やして、半分になった。我々が掘って、花を手向けてきれいに埋めた。副官が二人いたが、一人は全然なくて、一人は足だけあった。山本元帥は我々高砂義勇隊のために命を捨てて、国のために死んで帰った。元帥は、高砂義勇隊のためにいっしょに玉砕にいく予

山本長官の様子を再現するウィランさん

定をされていた。

"海ゆかば　水漬く屍
山ゆかば　草むす屍
大君の辺にこそ　死なん
かえり見はせじ"

山本長官は本当の元帥だった。

山本元帥の家族、子供いるでしょう。奥さんは？　山本元帥の家族に会いたいですよ。会って、私がお埋めしたことを伝えたい。

【玉砕命令】

原爆落ちて、広島とか死んだ。その時、終戦の三日前に天皇陛下の玉砕命令を受けた。一番最後に高砂義勇隊や熊本部隊、残っている部隊は玉砕命令を受けた。幸い行かなかったが、ガダルカナルに行く予定だった。

【台湾帰還】

戦争終わったら、中国の蒋介石はニューギニアから来た兵隊をソロモンと一緒にファール島という小さい島に集結させた。ニューギニアとソロモンの前の島。台湾部隊だけ日本の部隊と別れた。

高砂義勇兵も日本兵も玉音放送にみんな怒った。飛行機で宣伝ビラ落として、みんな海岸の前に来てください。台湾部隊は海岸に集められた。蒋介石の部隊はよくしてくれた。日本はそれから別れて、そのうちに

また会いますからと涙ぐんで別れた。どうして日本と高砂義勇隊別れるのか、蒋介石がいっしょにしないのかわからない。台湾に着いた時それもわからなかった。

【台湾帰還後】

基隆に着いたら、蒋介石の部隊が守っている。だれも歓迎してくれない。

中国の話よくわからない。台湾と蒋介石、（一九四七年の）二・二八事件あったでしょう。蒋介石の部下が山に上ってきた。下から命令きて、二・二八のあと十人捕まえられて引っ張られていってなくなった。山の中で偉い人みんなやられて、学生もみんな引っ張られた。

高砂義勇隊員は戦争に行ったこといわない。蒋介石はその時複雑だった。お互い口も開けない。その後、蒋介石も山の人を特別に愛してくれた。我々が山におって、着物、食べ物与えてくれた。

【日本は何故補償しないのか】

私たち一番心配したのは、日本人は私たちの指導者の家庭。私たち同じ家族で戦争に行って帰国した。日本人は戦争に行って残っているやつがよく与えられている。同じ苦労で、どうしてなぐさめの援助がないのか、それだけが一番納得できない。

補償すれば兵隊に行った人が喜ぶのに、どうして日本はこうなったのか。日本人はもらってるでしょう。私たちには一銭もない。蒋介石の命令で、私たちの賠償もとらない。蒋介石は日本で教育受けたから。日本の偉い人は、朝鮮はきれいにして、台湾の人にはこうなった。皆さんの慰めの心、日本のこと、いつまでも忘れない。

手元に貯金通帳はないが、熊本からいくらあると知らせてきた。それが一三〇〇円。四年半でどうしてこれだけか。この値段が四万元になった。みんなこうなっているか。兄さんの貯金は全然取らない。兄さんは三年半行った。弟の後に守っていくといってニューギニアにいった。この兄さんには一銭もなし。戦死した者には出すが、帰った者には全然出さない。そこが台湾の高砂義勇隊喜ばない。戦争に行ったのにどうしてこうなったか。台北の日本大使館にみんな受け取りに行かない。苦労した金なのに、どうしてそれだけしかくれないのかと、そんなもの腹立って受け取らない。

この問題、第三回高砂義勇隊で生きているものは十人ぐらいしか残っていない。苦労してきたんだから、私たちに補償してほしい。日本のためにやったからお礼もらわなければという気持だ。貯金通帳の補償だけでは苦しいですよ。家建てようにも建てようがない。

この私の心としては、今日本人ですよ。絶対日本が悪いとはいってません。

私二十年くらい台湾全島を巡回した。いろいろ兵隊にいった人残っている人少ない。第一小隊で十人いない。宜蘭では、私ともう一人の二人のみ。もう一人はしゃべっても記憶ない。もう年よ。神様を信じなさいといったら、「中野さん、私たちの金いつくれるか、貯金通帳いつくれるか」と聞いてきた。

今、元高砂義勇隊員で生きているものは一〇〇人ない。だから、運命のいい人、いま少し私みたいに残る。私の部落一人もいないよ、今。兵隊にいった人がかわいそうよ。南山で八〇歳以上は私だけ。六十五歳はいるが七十まではいない。弟は基隆の守備についていたが、三年前に死去した。

高砂義勇隊に参加した者を集めたことがある。すでに台北にいた時、話聞くと朝鮮は賠償もらった。私たちも要求したところ、蒋介石は台湾はすでに賠償取らないという命令を出していた。部落は大声で、あれは蒋介石のために我々もらえない。いえばつかまえられる。蒋介石死んだ後、台湾の人が日本に行って要求し

たところ、日本が、死んだ者には金あげる、死なない者には出さないという。これ大きい問題。

私が台湾の兵隊の代表として日本に行って偉い人に話したい。台湾は前は日本だったですよ。私たちは日本に生まれた。戦争になったら兵隊らしく日本のために戦争した。今の総理に話してみる。日本の偉い人、早く台湾に来て慰めてくれれば気持いい。

現在の南山部落の風景

【村長時代】

台湾に帰ってきて一九四七年に結婚してから村長を四年間やった。子供五人生まれてから村長になった。村長の選挙は二年に一回あった。その後、郷の代表を六年間やった。南山部落は当時一三〇軒ぐらいあった。

はじめ頭痛かったのは部落の発展のこと。部落はみんな土の中掘って家作った。あちこちにあった部落集めて、中は道造り、両方に家建てて四列にした。この時、家造るのとってもきつかった。ある者は反対した。造った後は、わー気持いい。道造りには部落の人が自分で仕事し、三対七で郷の会所から出す。

兄さんは日本の自治会長にあたる頭目だった。私が部落で一番初めに家建てた。山の中で木を切って、板にした。日本時代は鋸もなくただ蛮刀だけで作業した。一九四五年から八年後、村長になった時、家を建てた。部落のみんなは笑ったが、暴風

あった時は私の家に飛び込んできた。皮も檜の皮だった。それから部落の人もまねして造るようになった。二〇年してから人間頭も良くなった。野菜や杉・竹など植えだした。

第二に悪い習慣を直す。前のおじいさんの時代の習慣は、これやったらいけない、あれやったらいけない。結婚して、別の女つかまえたら二頭の豚取る。それをやったら、悪い習慣。牛・豚を賠償として部落に出す。そういう習慣をなくした。

大きいのは老人への手当。苦心して、若い時から苦労したから、上に要求して一人に三〇〇〇元支給するよう働きかけて、県議会、立法院が決議して六十五歳から上に支給されるようになった。

【子供のこと】

子供は十三人生まれたが、残っているのは五人。八人は病気でなくなった。三歳から四歳の間にどういうわけかたくさん死んだ。昔のころ、文化あまり発達しない。生活も定着しない。住む場所も地下に降りる。食べ物は前はさつまいも・粟。米は少ない。着物もないし、寒さとか食べ物の問題。一年に一回生まれた。あまり早すぎる。昔は家族計画なし。遊べばそれでいいという状況だった。生まれるということを考えてない。頭悪い、歩けない子二人いた。

六番目の女の子が神戸で結婚してたので遊びにいったが、ひどい地震で建物の十七階でなくなった。

この（台北の）家に住んでいるのは生きているうちの男で二番目。上の息子は教会の牧師をしている。男は二人だけで、女が三人。上の娘が南山にいる。娘の一人は中国の広州にいる。

【巡回牧師として】

長男は腎臓で十八歳でなくなった。試験受けて先生になるつもりだった。すごく頭良かった。その晩、学芸会で歌を歌ったりしていた時こけた。痛い、痛いと。二、三日して腎臓おこしてから腫れた。私が宜蘭の病院に連れていった。本当に大事な子供で、たくさん財産使って、タクシーで一〇〇〇元使った。治らないで、台湾大学の病院へ。それでも治らない。腎臓を治す薬なかった。

埔里キリスト教会で一年。辛いもの絶対食べない。最後に私がそこに一ヶ月いたが、この子どんなにして薬ない、アメリカから薬送ってこない。おかゆばかり食べてダメだった。そこで亡くなった。死体が宜蘭に帰ってきてから、腹立った。これから先どうするか。便所の中で祈って、私悪い人、罪人の人、こういう状態になるとどうするか。そこで私は決心した。学校に入る、と。台北の聖書学院に入った。当時子供七人が残った。

最初に信仰してからアメリカの牧師がかわいがってくれて、卒業するまで一〇〇〇元の月給あった。当時は大きかった。学生は十八人。その中で山の人は私一人。この中で一番頭良くない。先生は、日本の名古屋と東京から来た先生、アメリカ人一人、台湾一人など。信仰あまりなかった。特別おとなしい学生で、国語あまりできなかった。学校の中で、生年順で五番に入った。特別に学校の中の選挙で選ばれて班長になった。よく仕事した。巡回伝道に出ていた時、七歳の子がひどい病気で一晩で亡くなった。アメリカも日本も感動した。私の家に来て五〇〇元出してくれた。

私に一五〇〇元くれて、一五〇元は神様に納めて、一三〇〇元で生活。子供は健康だった。教会の中良くなって、頭良くなって、私あまり家にいない。一ヶ月、二ヶ月他の部落に行く。一人も信者がいない部落にいったら、部落の人つかまえて、信じたら元気になると話す。一、二回は五人ぐらい。いい話しかしない私

の態度見て、神様を信じるようになる。家庭もぱあっと明るくなる。

子供山にいると後れるから台北で育てようと、三十年前小さい家を買い、台北へ移った。民国五十七年（一九六八）、長男（現在四十五歳）が六年生の時、次男が二年生の時。前の家は新生北路にある。円山大飯店の近く。その時も苦しかった。アメリカも助けてくれた。一ヶ月月給が六万円だった。

息子は日本の国際基督教大学にいかした。今、台北市の原住民協会（※台北神愛教会内に、台北市原住民関懐協会がある）で、山の出身で台北にいる人を助けている。初めに集会した時は五人のみだった。台北で教会を建てるのは簡単ではない。

日本にも教会の関係で二年に一回いった。六年前と八年まえ。この時は高砂義勇隊の話はしなかった。牧師として入った。山梨、四国、熊本、静岡、横浜、神戸、大阪、東京、東北に行った。

南山の家には時々帰っている。この正月にも帰った。帰らないと山の魂が。それに畑も家もある。南山では太郎さん（※長女の夫）が家を継いでいる。私の籍は南山にある。

【キリスト教について】

キリスト教が入ってきたのは日本が去った後だった。二十三歳で結婚して、後アメリカ軍が私をつかまえて台北の三光聖書学院で勉強させた。二十三歳から信仰して教会を建てた。頭の悪い者は三年四年とかかるが、私の時は一年間勉強して巡回牧師になった。それまではキリスト教は信仰してなかった。兄さんも信じなかった。アメリカは人を見てこの人と決めてくる。自分の希望もあったし、勉強も好きだった。

キリスト教は山の文化と合った。山の習慣は悪くない。キリスト教もやや同じ。信仰するとおとなしくなり、あまり酒も飲まなくなる。ますます反対心がなくなって、キリスト信仰になっていった。

今はほとんどキリスト教になっている。キリスト教に変わったのは人間も変わったから。悪いことしない、殺人もない。首狩は日本時代少しあった。

現在村に教会が五つある。村の人口は五〇〇何人で、戸数は一七〇～一八〇軒ぐらい。

ウィランさんが南山部落に建てた教会

【日本への思い】

日本をよく尊敬した。部落の中のいい日本人、合作（※協力関係のこと）とってもよかった。

日本の国だったから、日本がにくいという気持がない。日本が育てて、日本語も教えて、勉強も生活も教えてくれて、離れるとは全然思わなかった。離れたのは我々も涙ぐんだ。日本と離れてから六十年。考えてみたら指導が大分違う。自由主義だから前の帝国主義がいい。日本は今、自由主義でしょう。蒋介石より日本の支配の方がよかった。ひきあわない。日本人の指導法は、今日やれば明日ペイする。今はいくら頭良くても、金のないやつはペイしない。

高砂族は蒋介石が指導したのを忘れない。選挙では、山の人は国民党多い。民進党には十分一も入らない。台湾の元は台湾の原住民。福建から流れて、台湾に着いて台湾人となっているのとは言葉も違う。台湾の山の人は南の島から来た。台北市でも南方から流れたものがだいぶ入っている。

問題は、日本人は台湾に来て相当苦労した。いろいろな苦労してすべて生活、着物の着方、作り方、山の機織、パンツはくこと……。日本人来て、台湾の山のために指導してくれて感謝している。戦争あって、私たち活躍したのに日本と台湾と離れるのが全然わからなかった。ふるさとの親と子供みたいで、子供は日本絶対忘れていない。日本は私たちの親だから、子供どうしているか、日本の親が面倒みてくれないと、捨てられていくと思われる。日本がなぐさめに来て、いつか会います、苦労した、そのなぐさめの気持が欲しい。

一番大きい問題は、山本五十六の家族があれば、私が埋めたこと、それに対して慰めの言葉がほしい。国のために戦争し、本当に苦労した。お母さん万歳、天皇陛下万歳といって死んだ。そして、また一人死んだ。

離れたのは我々も涙ぐんだ。戦争の前には日本は必ず高砂族をよく見てくれた。光復（※日本の植民地支配からの解放と主権の回復）後日本は離れて、日本も台湾もごたごたして、本当に良心から原住民を慰めていこうという気持があるかないか問題だ。兵隊の時我々は手柄立てている。日本は負けた後、日本は日本、台湾は台湾となった。このことが全然わからなかった。蔣介石後は台湾は台湾となっている。

日本と高砂族はとっても合う。高砂族が日本にいったら自分の家族みたい。日本の人、山に入ったら高砂族と同じよ。

Ⅱ．元高砂義勇隊員ウイラン・シマオさんの証言について

(1)ウイラン・シマオさんの証言のあらまし

ウイラン・シマオさんは、一九二三（大正十二）年（戸籍では大正十三年）一月二十七日に台湾台北州羅

東郷南山部落（現宜蘭県大同郷南山）に生まれた、原住民出身者（タイヤル族）である。部落は、以前はビアナン社といっていた。日本の台湾植民地支配下の部落で、「日本人」としての教育を受け、幼少から青年時代を過ごした。青年団では、兄が団長、自分は分隊長として、兄弟で部落の若きリーダーとしての役割を果たす村の模範青年であった。

一九四一（昭和十六）年十二月の太平洋戦争開始に伴って台湾で高砂義勇隊が組織され、数千人に及ぶ原住民の青年がフィリピンやニューギニアなどの南方戦線に送り込まれた。同氏は自ら高砂義勇隊に志願し、第三回高砂義勇隊員として、一九四三（昭和十八）年から一九四五（昭和二十）年の日本の敗戦まで、ソロモン諸島のブーゲンビル島に派遣された。[1]

ブーゲンビル島の日本軍は米豪連合軍の反攻を阻止する南東太平洋方面の重要な戦略拠点として、徹底した持久作戦が求められた。制空権・制海権を奪われた日本軍は、ブーゲンビル島への補給が出来なくなり、現地では自給作戦を余儀なくされた。このような状況にもかかわらず、島に陣地を構築し戦備を整えた連合軍に対し、決死の攻撃作戦が展開され、多くの犠牲者が生まれた。食糧難による飢餓生活と赤痢などの病気による死者も多かった。この戦病死者の多さから、ブーゲンビル島は「墓島」ともよばれている。

このブーゲンビル島で飢餓線上の体験をしたウイラン・シマオさんは、日本の敗戦後台湾へと送還されて、故郷の南山部落に帰る。帰還後、故郷では村長に選ばれ、地域のリーダーとして部落の発展に努めた。その後、生活上の必要性からキリスト教の牧師の資格を取り、巡回牧師を務めた。現在は牧師の仕事もやめ、台北市で老後を送っている。

ウイラン・シマオさんへの聞き取りは、生い立ちから青少年時代、高砂義勇隊員としてのブーゲンビル島での戦場体験、台湾帰還後の村長としての村への貢献、キリスト教の牧師としての仕事と全半生期にわたっ

ている。その中心は、日本統治時代に受けた教育と高砂義勇隊員としてのブーゲンビル島での戦場体験である。

(2)日本統治時代の教育の状況

ウイラン・シマオさんは、日本が台湾統治を始めた一八九五（明治二十八）年から十八年後の一九二三（大正十二）年に生まれている。この時期は、日本の統治初期、台湾の西部を中心に展開された漢民族系台湾住民による組織的抗日暴動や原住民の抵抗への制圧作戦が、台湾総督府による一九一五（大正四）年の理蕃五ヶ年計画の完成をもってほぼ終結してから十年近くを経過しており、原住民への日本人化教育が本格的に行われていたと考えられる。

小学校（公学校）や青年団では、日本語の教育と普及が徹底して行われ、天皇への忠誠・愛国心を注入する天皇制教育が行われた。ウイラン・シマオさんらはまさしく「天皇に忠実な日本人」として育成されたのである。

そして、青年期を迎えた時期に太平洋戦争がおこり、総力戦体制がしかれる中、台湾原住民の青年が当然のごとく高砂義勇隊に志願していく雰囲気が作られていった。証言から、当時の原住民の日本人化や戦争への動員において、小学校や青年団の果たした決定的な役割をうかがい知ることができる。

(3)ブーゲンビル島における戦争の状況とウイラン・シマオさんの体験

太平洋戦争が始まると、台湾の原住民出身の青年は半ば強制的に高砂義勇隊に志願させられ、南方の戦場に送られた。最初は物資の荷役など日本軍の補完的役割を与えられていたが、山地民としての生活力や戦闘

における能力の高さが注目され、偵察行動や敵前攻撃に動員されたり、南洋のジャングルでの食料の確保、治療に役立つ植物の採取などその際立った活躍がニューギニアなどでの体験報告に残されている。[2]

ブーゲンビル島での戦争がどのように展開されたか、そこにおける高砂義勇隊員としてのウイラン・シマオさんの戦場体験についてみていこう。

戦争の概況

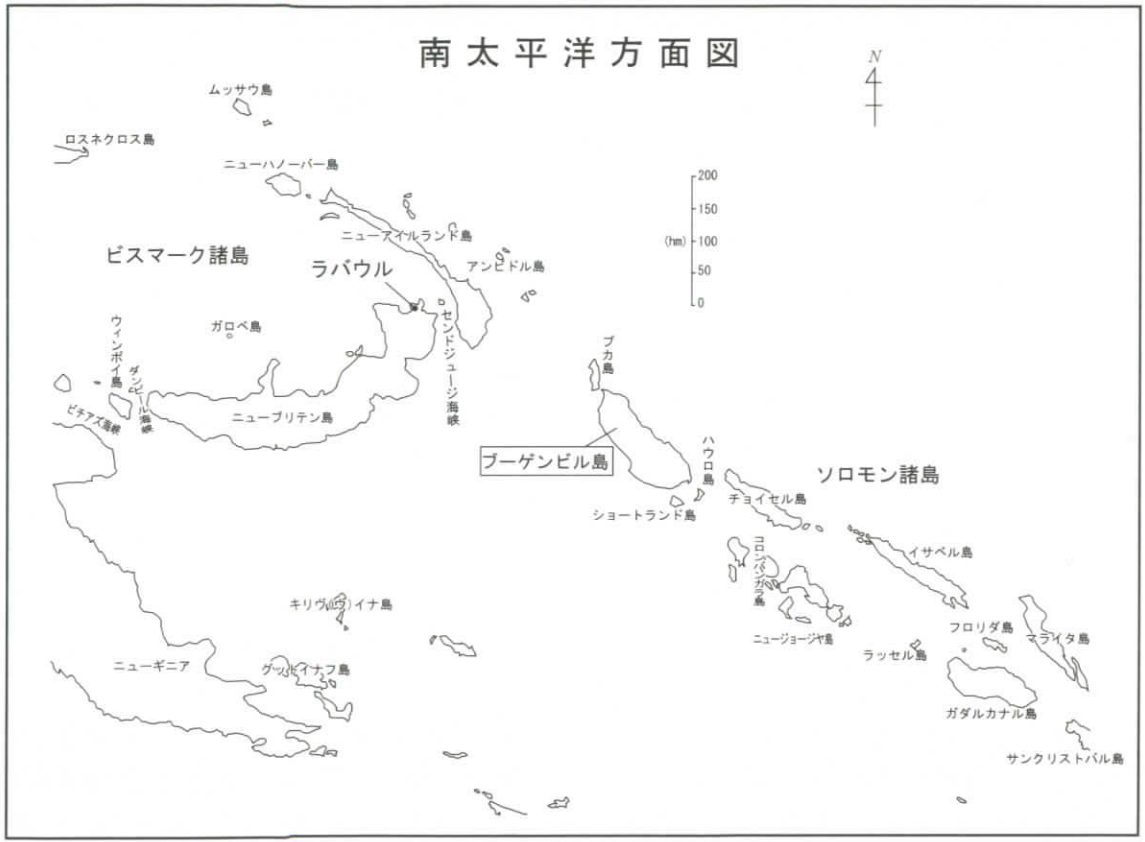
まずブーゲンビル島における戦争の概況をみておきたい。

南太平洋方面において米軍の本格的な反攻作戦が展開されたソロモン諸島南東部のガダルカナル島で日本軍は惨敗し、一九四三（昭和十八）年二月同島から撤退する。その後の南東太平洋方面の戦いも消耗戦となった。

同年九月三十日の御前会議で絶対国防圏が設定された。この下で、大本営は「南東方面要域において極力持久を策し、この間すみやかに豪北方面から中部太平洋方面要域にわたり、反撃作戦の支トウを完成し、敵の反攻企図を破砕する」という作戦構想を打ち出した。

同年八月十二日に中部ソロモン撤収を主眼とする「南東方面作戦に関する陸海軍中央協定」が採択された。この協定には、作戦指導として、「陸海軍緊密に協同し東部「ニューギニア」以東「ソロモン」群島に亘る南東方面の要域に於て来攻する敵を随時撃破し以て極力持久を策す　之が為　一「ラバウル」附近を中核とする「ビスマルク」諸島及「ボーゲンビル」方面要域の防備を強化し極力永く之を保持するに勉む」と記されている。南東方面における持久作戦が強く求められていることが読み取れる。南東方面は米豪軍が反攻作戦を展開する場合、この付近から中部太平洋方面とニューギニア北岸沿いからフィリピン方面へと二線に分

南太平洋方面図


N
ムッサウ島
ロスネクロス島
ニューハノーバー島
ニューアイルランド島
アンビドル島
ビスマーク諸島
ラバウル
ガロベ島
ウィンボイ島
ダンピール海峡
ビチアズ海峡
ニューブリテン島
セントジョージ海峡
ブカ島
ブーゲンビル島
ハウロ島
ショートランド島
ソロモン諸島
チョイセル島
イサベル島
コロンバンガラ島
ニュージョージヤ島
ラッセル島
フロリダ島
マライタ島
ガダルカナル島
サンクリストバル島
キリヴィナ島
グッドイナフ島
ニューギニア
200
150
(hm) 100
50
0

かれる扇の要のような戦略的位置にあるため、日本軍にとって戦略的前進陣地として重要な位置付けがあたえられたのである。

第八方面軍は、同年十月七日、方面軍命令を下達した。そこには、「作戦指導の重点を「ダンピール」海峡地帯及「ブーゲンビル」島の確保に指向す」とある。命令に添付された別冊の「第八方面軍作戦計画」の「第二作戦指導要領」には

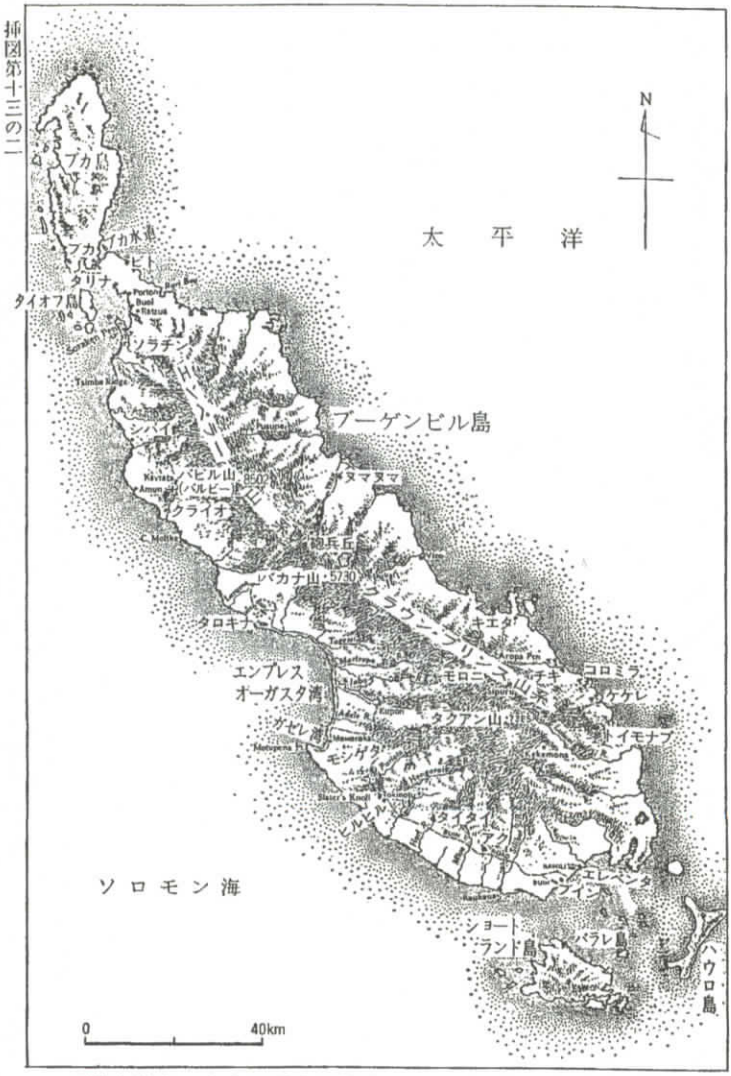
「一　海軍と協同し作戦を先つ「ダンピール」海峡地帯」及「ボーゲンビル島」の確保に指向し空陸海の戦力を統合発揮して極力敵を海上又は水際に於て各個に撃摧し状況止むを得さるもその上陸初動に於て之か撃破に務む

敵既に陸上に地歩を占め彼我の戦力上敵を撃破し得さる場合に於ても各要地を逐次固守して為し得る限りの打撃を敵に加ふると共に持久期間の延長を図りその縦深的総合戦果に依り極力前方要域に於て敵の攻勢を破摧するに務む」「五　「ソロモン」「ビスマルク」群島方面「ソロモン」群島方面に於ては「ボーゲンビル」島の要域特に「エレベンタ」「キエタ」「ブカ」附近の要地を占領し来攻する敵を撃破して之を確保し……」とある。[3]

このように、ブーゲンビル島での戦いは戦略的持久作戦の下、「各兵団部隊の後退を絶対に認めず、その占拠位置で必死敢闘、敵に対しなしうる限りの打撃を与え、その縦深的総合戦果により、全般的持久任務を達成しようとする」[4]ものであった。

この第八方面軍命令に基づいて、第十七軍は、十月十五日、北部ソロモン諸島防衛のための軍作戦計画を策定した。この計画では、「第一　方針」として、「軍は海軍と密に協力し北部「ソロモン」群島に進攻する敵を邀撃して之を撃滅し以て敵の西南太平洋方面に対する反攻企図を挫折せしむ」としていた。「第三　指

ブーゲンビル島地名図



『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦　＜３＞』（朝雲新聞社）

導要領」では、「四　敵上陸に際しては機を失せず企図する正面に陸海総合戦力を集中し攻勢拠点を支撐として之を海上及水際に撃滅す　敵空中降下部隊に対しては其の主力との連繋成るに先たち之を各個に撃滅す」「五　敵の圧迫を受け海岸攻勢拠点の保持不可能なる場合に於いては内部要点に於て逐次敵の攻勢力を破摧し極力持久を策す」「六　「エレベンタ」附近及「タリナ」附近に夫々複廓的攻勢拠点を準備し状況已むを得さる場合に於て之を確保す」とある。[5]

任務としては、第六師団にブーゲンビル島西部及び南部の防衛、第十七歩兵団にブーゲンビル島東部及び北部並びにブカ島の防衛任務が与えられた。他に部隊として、エレベンタ附近で主として飛行場を防空するエレベンタ防空隊、タリナ泊地を防空するタリナ防空隊、軍通信隊、それに海上輸送作戦などを担当する軍海戦隊が組織された。これら陸海軍の人員の総計は四万一千人であった。

十一月一日、連合軍はブーゲンビル島西部のタロキナに上陸し、飛行場を建設した。これに対し、第十七軍司令部は上陸中の敵撃滅と逆上陸部隊の準備を指令したが、後者はラバウル出港直前連合軍による空爆で出発が遅れ中止となった。タロキナ攻撃を担当した歩兵第二十三連隊は湿地の中を前進するが、敵迫撃砲の集中射撃を受け、後退した（第一次タロキナ作戦）。

一九四四（昭和十九）年二月十一日、第二次タロキナ作戦に関する軍命令が出され、タロキナ付近の敵陣地内部で決戦、敵を殲滅するとし、その任務が第六師団に与えられた。二月十五日、連合軍はグリーン島（ブカ島の北西、ラバウルの真東二〇〇キロ）を攻略し占領した。これにより、第十七軍に対する海上輸送は全く遮断されることになった。[6]三月の時点で、第八方面軍は参謀次長あて電報でその窮状を以下のように述べている。

「一　第十七軍は今や一艦一機の協力もなく乾坤一擲全力を傾注して「タ」号作戦を敢行し奮戦中なり

然れ共其の成果如何に拘らす同軍に対する今後の補給は実に深刻なる状況に直面しあり即ち本件に関して報告せる通り在「ブーゲンビル」島陸海軍の糧秣は六〇〇瓦の補給定量にて概ね四月末を以って消尽す

二　「ブーゲンビル」島方面に対する補給輸送は専ら潜水艦に依存せさるへからす（以下略）[7]」

このように、ラバウルからの輸送と航空攻撃の支援がえられない状況で作戦が展開されたのである。この戦闘は、米軍による迫撃砲の猛射と戦車による逆襲で攻撃部隊が全滅し、第十七軍は攻撃中止の命令を下達した。

三月二十七日、第十七軍は、「軍は一部をもって「タロキナ」附近の敵に触接せしめ常時敵の飛行基地妨害を策すると共に主力を「ブーゲンビル」島南部に集結して次期攻勢を準備す」とする「方針」の新措置を発令した。

その後各方面で小戦が繰り返された。この間、軍の保有糧秣がタロキナ作戦を最後にほとんど消尽し、ラバウルからの補給も四月以降潜水艦輸送が多少実施されたが間もなく途絶したため、食糧事情が深刻化してきた。そこで、諸部隊は現地自活態勢の確立に全力を尽くした。マラリアや栄養失調が蔓延し、多くの戦病死者が生まれた。十二月下旬の第八方面軍の報告によれば、十二月十二日現在の兵力は二三〇五三名と報告されている。

一九四五（昭和二十）年二月二十二日から、第一線に対する補給兵站基地であったモシゲタに対する豪軍の攻撃が始まり、二月末、日本軍はここを放棄し、プリアカ川以南に撤退した。

同年三月二十八日、第六師団によるプリアカ作戦が開始された。師団の全力を挙げて豪軍に対し、「短切果敢な攻撃を敢行し、敵の進攻意志を挫折させ」ることが方針とされた。この作戦は四月八日まで展開され、

豪州台の豪軍防御陣地を攻撃したが撃退され、作戦初期の目的を達成できなかった。

同年四月下旬、第十七軍はエレベンタ決戦の準備に入る。決戦要綱では、方針として、「軍は全員玉砕を期し、敵の攻勢をエレベンタ地区に邀撃するため、八月末日迄に堅固な主陣地帯を構築し、これを根拠として短切果敢な攻撃を反覆し、飽く迄一人十殺の成果を獲得する」とある。この決戦要綱に基づき全面的な決戦態勢を確立するため、部隊の改編が行われ、本然の任務のほかに、歩兵部隊が以下のように編成された。[18]

○軍指令部　歩兵一大隊　○船舶工兵第二連隊　船舶中隊一、歩兵中隊三

○野戦貨物廠ボ島支廠　歩兵中隊一　○野戦兵器廠ボ島支廠　歩兵中隊一

○第七十六兵站病院　歩兵中隊一　○高砂義勇隊　歩兵中隊二

○第六師団残留隊　野砲兵第六連隊　歩兵大隊一　歩兵第十三連隊　歩兵中隊一　兵器勤務隊　歩兵中隊一

師団司令部　歩兵中隊一

ここでは、高砂義勇隊が歩兵二個中隊として決戦部隊に編成されていることが確認できる。

連合軍はプリアカ作戦終了後、攻勢をかけ次々に日本軍の拠点を突破、四月下旬にはホンゴライ川の線まで進出した。そして、五月下旬にはタイタイ付近に進出した。軍司令部は、ブーゲンビル島で最大の川幅をもつミオ川以西で一大反撃を加えるよう第六師団に命令した（ミオ作戦）。日本側の必死の反攻に対して、七月に攻撃前進開始を予定していた豪軍は豪雨により、前進開始を八月末まで延期した。

この状態で日本の敗戦を迎えた。敗戦時の第十七軍の総兵力は、軍人一三六四五名、軍属七三七名、合計一四三八二名と報告されている。

山本五十六連合艦隊司令長官の戦死

一九四三（昭和十八）年四月上・中旬、連合艦隊がソロモン諸島およびニューギニア方面連合軍空海兵力の撃破を目的として「い」号作戦と呼ぶ航空進攻作戦を行った。この作戦集結直後に前線視察として、四月十八日午前六時五分、ショートランド方面の視察とブーゲンビル島の第十七軍司令部の訪問を目的に、山本五十六連合艦隊司令長官一行の二機と護衛機六機がラバウルを飛び立った。七時四十分頃ブイン上空付近で、敵戦闘機十数機と遭遇し空戦となり、長官搭乗機がブイン西方の密林中に墜落、宇垣纏連合艦隊参謀長の搭乗機はモイラの南方海上に不時着した。

阿川弘之『私のソロモン紀行』（中央公論社）

同日、ただちに陸海軍で捜索活動が開始されたが、陸軍では、第六師団第二十三連隊砲中隊の西野軍曹を長とする捜索隊が編成され、昼頃、最初に墜落現場に到着し、長官搭乗機を発見する。[9]

翌十九日、再び浜砂少尉を長とする捜索隊が派遣され、墜落現場に至った。そこで、捜索隊は「陸攻機からそのまま移したかのように座席に腰を下ろし胴しめを締め、黒鞘の古刀のままの軍刀を両膝にはさむようにして突きたて、うなだれ」た

山本連合艦隊司令長官の死体を発見する。[10]

捜索隊は十一体の遺体を確認し、遺体安置の棚を作り、安置。夕刻ジャングルを引き返している途中で、ブインから派遣された海軍捜索隊の小部隊（佐世保鎮守府第六特別陸戦隊第一中隊第一小隊、隊長吉田雅維特務少尉）に出会う。翌二十日、遺体安置所に到着して、遺体を海軍に引き渡す。吉田中尉は遺体を担架に乗せ収容した。同捜索隊からワマイ川川口でラバウルから派遣された渡辺安次戦務参謀に遺体が引き渡され、第十五号掃海艇でブインに運ばれた。ブインの第一根拠地隊の庁舎前にテントを張って、その中に安置され通夜が行われ、翌日、車で十五分ほど離れた佐世保鎮守府第六特別陸戦隊の農場で火葬が行われ、骨上げのあと、穴に埋められ土饅頭が築かれた。[11]

ウイラン・シラオさんの戦場体験

ウイラン・シラオさんはラバウルを出発してからソロモン諸島の島に上陸したと証言しているが、その島の名前は忘れたとのことである。しかし、山本五十六連合艦隊司令長官の遺体を確認し、埋葬したという証言、熊本部隊（第六師団）と合流したという証言からして、ブーゲンビル島に派遣されたことは間違いない。

証言によれば、一九四二（昭和十七）年十月に台湾の高雄を出発し、海上で二ヶ月してラバウルに着いた。そこから第二回の派遣としてブーゲンビル島に向かった。上陸地点は「タルシシの海岸」とあるが、地図上で確認できない。「ソロモンで一番大きな川」を渡ったとあるが、これをブーゲンビル島のミオ川と考えるとその川の周辺ということになる。山本五十六連合艦隊司令長官の遺体を確認したという証言から、墜落地点に比較的近い所に所属部隊が駐留していたと考えられ、敗戦まで日本軍の飛行場があったブインの西方のいずれかの地点に留まり、大きく移動することはなかったと思われる。

一九四三（昭和十八）年十月、ブーゲンビル島死守の持久作戦が決定され、連合軍のタロキナ上陸に対して十一月には第一次タロキナ作戦が展開されている。ブーゲンビル島における戦争の概況で述べたように、その後様々な反撃作戦が行われたが、ウィランさんの所属部隊が主要な戦闘に参加したという証言はない。上陸後、連合軍の攻撃が激しく、海岸線で戦闘した後は移動した地点で後退することもできない状況であったことが語られている。

証言の中心は、食糧事情が極めて厳しかったこと、赤痢やマラリアで戦病死する兵隊が多かったこと、である。島上陸後二年以上まったく食糧の補給がなく、自給作戦の下、作物を育てることに汲々とした日々を送ったこと、山地原住民出身者としての生活の知恵を存分に発揮し、治療薬になる野生の植物の採取や動物の捕獲により、日本の兵隊の命を救ったことがリアルに語られている。[12]

山本五十六連合艦隊司令長官の死については、墜落現場で見た山本長官の遺体の様子が語られているが、これは陸軍の捜索隊の証言内容と一致している。ただウイラン・シラオさんが捜索隊の一員であったかどうかは明確ではない。発見後、遺体の埋葬が行われて、その直接の作業に携わったのが自分を含めた高砂義勇隊員であると証言されている。

日本の敗戦直前、玉砕命令を受けガダルカナルに行く予定であったと証言されているが、すでに制海権・制空権が完全に連合軍の下にあるガダルカナルを攻撃することはまったく考えられないことから、ブーゲンビル島における最重要陣地のエレベンタ地区の攻勢的防御作戦に関わる玉砕命令であったと思われる。

(4) ウイラン・シラオさんの願い

ウイラン・シラオさんは、日本の敗戦から六十年目もたった二〇〇五年になって初めて詳細に高砂義勇隊

員であった自分の戦争体験を語った。日本にもキリスト教の牧師として訪れる機会はあったが、同僚の牧師に対してもその戦争体験を一切語ることはなかったという。六十年間、胸の中にしまっていた記憶をどうして人前で語る気になったのか、その思いについて考えてみたい。

自分は日本の領土となった台湾で「日本人」となり、「日本兵」として日本のために命を懸けて戦った。食糧補給が完全に断たれた戦場で、飢餓線上を生き延びるという極限の体験をしてきた。同時に、この戦場での戦闘や日本軍の食料確保、兵士の病気の治療などにおいて特別の貢献をした。山本五十六連合艦隊司令長官の埋葬作業にも参加した。

こうした地獄の戦場に数千人の台湾原住民が高砂義勇隊員として動員され、多くの若者が犠牲となった。台湾に帰還できた原住民の若者も今では多くは死去し、元気に生存しているものはほとんどいなくなった。視力は衰えたが、まだ記憶がはっきりしているうちに自分のありのままの体験を伝えておきたい、そういう思いがふつふつと湧きあがってきたと思われる。

それは、単に戦場体験を後世に伝えたいという思いだけではない。戦後、日本が台湾（中華民国）と断交して以来、日本は高砂義勇兵として戦った台湾原住民に十分な補償をまったくしていない、我々は紛れもなく「日本兵」として戦ったのだから、その補償は当然である。自分は元高砂義勇兵を代表して、日本政府の代表者に直接会って、この補償を強く求めたい。

このような思いがウィラン・シラオさんを駆り立てているに違いない。

台湾原住民のリーダーとして、最後までその使命を果たしたい、それがかなわなければ、むなしく散っていた同僚たちに申し訳ない、という熱い思いが伝わってくる聞き取りであった。

注

(1) 林えいだい氏の著書『証言台湾高砂義勇隊』(草風館)には、第二中隊第二小隊長であった玉丸常夫氏の報告書「第三回高砂義勇隊の歩みたる一般状況に関する報告書」が資料として掲載されており、同隊の動きが以下のように記述されている。

昭和十七年十月十九日高雄港出港。十一月十四日ラバウル入港、十七日同港出港。十一月十九日ショートランド島停泊。十一月二十五日ニュージョージア島に上陸。昭和十八年二月十八日ニュージョージア島を発ち、二月十九日ブーゲンビル島着。二月二十二日同島を出港、二月二十三日にラバウルに入港。三月九日同港を出港、三月十四日ニューギニアのウエワク港に入港。(ここで部隊はニューギニアの戦闘に参加) 昭和十九年一月二十日、玉丸小隊長と隊員七名は、遺骨とともに事務打ち合わせのため台湾出張の命令を受け、同港を出港、二月二十七日高雄にて下船した。一方、ニューギニアの高砂義勇隊は、同島ホーランジャ沖で帰還途中の輸送船が敵機の爆撃を受けてほとんどが死亡したことになっている。林氏の著書では、「第三回高砂義勇隊は、総数四百十四人のうち、四百四人が戦死している」(一四六頁) とある。

ウイラン・シラオさんは、「自分は、第三中隊第一小隊第六分隊の所属」と証言しているので、玉丸氏の第二中隊とは所属が違う。第二中隊がニューギニアに、第三中隊がブーゲンビル島に派遣されたと解釈すればつじつまがあう。

(2) 門脇朝秀著『台湾高砂義勇隊』、林えいだい著『証言台湾高砂義勇隊』(草風館) など

(3) 『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦』〈三〉五四〇頁

(4) 『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦』〈三〉五四四頁

(5) 『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦』〈三〉五四五頁～五四六頁

(6) 第十七軍残務整理部による「ボーゲンビル島の作戦」(防衛研究所図書館蔵) によると、食料の補給状況が次のように記されている。

「給養「ボ」島の作戦を考えるときに給養のことを度外視して論ずることは出来ない。「ボ」島に輸送船が来たのは昭和十八年の八、九月頃まで、それから後もしばらく海上トラックで「タリナ」附近迄若干の輸送がつづけられたけれども昭和十九年になってからはそれすら不可能になった。電探を装備した哨戒機が常に活躍して居ったからである。そこで吾等は潜水艦による輸送に期待した。然し之も電探の網をくぐりぬけることが出来なくて同年の三

月末以降は完全に補給を遮断されてしまった。

「タロキナ」攻略作戦は全力を傾けて行はれた。残余の軍需品も戦力を培養する為最大限に使用されたのは当然である。そこでこの作戦が失敗に帰したときは食ふべき何物も残って居らなかった。甚大なる損害を受け辛じて生き帰ったものでも体力が著しく消耗してゐるのに之を恢復する何物もなかった。そして、銃を捨てると鍬をとった。作戦間に荒れ果てた耕作地はもとより密林を抜開して開墾につとめた。その間、補給したものは、第六師団の例をとれば四月米一〇〇瓦、五月六十瓦、六月以降は皆無で、他は一切現地物資を利用するより仕方がなかった。」

(7)『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦』〈四〉四八四頁

(8)『戦史叢書　南太平洋陸軍作戦』〈五〉二七四頁

(9)『都城歩兵第二十三連隊戦記』七八一頁～七八二頁

同戦記に、そのときの状況を連隊砲中隊の市川一郎大尉が思い出として書いている。

「西野軍曹は顔面を蒼白にし、唇をふるわせながら墜落現場の模様を次のように語った。一式陸上攻撃機は不時着の姿勢で滑走しながらジャングルへ突入燃上したものらしく、土人道と勘違いするほど一〇〇メートル以上もジャングルの先端が削り取られていた。機体の中は黒こげになった死体がいくつかあって、飛行機から少し離れたところに大将、少将の二人の死体が焼けずにあった。「この大将は山本五十六ではないかと思います。左手の白い手袋の中指と薬指とがくくりつけられており、日本海海戦で指二本を失った山本五十六大将のものと一致します。これは軍服に着いていた大将の襟章です」と言って西野軍曹は大将の襟章一個を私に手渡した。」

(10)『都城歩兵第二十三連隊戦記』七八三頁～七八六頁

同戦記の中で、浜砂少尉は「海軍大将山本五十六閣下の戦死現場発見の思い出」と題する遺体発見の状況に関する手記を書いている。

「捜索隊はここに求めていたものを発見し、立止まった。皆息をのんでこの現場を見つめている。私は皆を制しそこへ踏み込む前に大声で呼んで見た。「オーイオーイッ。生存者はいないかッ」。じっと耳を澄ましたがどこからも答えはない。耳を澄ませながらあちこち見まわす。目に入って来るのはさまざまな姿勢で倒れている無言の死体だけである。私たちはまず、機の胴体の部分に突進した。一式陸上攻撃機と鮮かな機名と標識の日の丸とが目に映る。胴体の中は空ッポで緑色の海軍食器がいくつか散らばっているだけ。さっき前進中で樹間に見えた妙な物はこの大きな一式陸攻（双発機）の胴体や翼であった。

そこから左前方三〇メートルくらいのところに、焼けただれた機関部があって、そこには飛行帽着用のまま黒焦げになった操縦者が三名折り重なるように倒れており、その周辺だけジャングルの緑の木々が大きく上に向って褐色に燃え抜けている。また、胴体の左側二十メートルくらいのところに生ける人の如く座席に腰掛けた人がいる。近づいて見ると、陸攻機からそのまま移したかのように座席に腰を下ろし胴しめを締め、黒鞘の古刀のままの軍刀を両膝にはさむようにして突きたて、うなだれている。両手で堅くにぎった刀の束頭におとがいの先がふれんばかり、深くうなだれている。頭は坊主刈で帽子は飛んでしまったのであろう、ない。衣袴は海軍の第二種軍装とかで白色、靴は飛行機靴だろうか、半長靴をキチンと着用している。襟章を見ると大将の襟章で、胸には多くの略綬が輝いている。刀の束頭を堅くにぎった両手は白の手袋をしている。純白で少しも汚れていない。左手は指が二本なくその分の指袋は根もとのところから切とって縫い閉じてある。それが私には妙に痛々しく見えた。胸ポケットに手帳が見えるので、私は恐縮しながらこれを取り出し開いて見た。表紙の見開きに、「山本五十六」と署名してあり、第一頁には、明治天皇、昭憲皇太后の御製が数首写してあり、……。

もう間違いなかった。このご遺体は山本五十六大将であった。」

(11)『都城歩兵第二十三連隊戦記』七八八頁、阿川弘之『山本五十六』(『阿川弘之自選作品』V　新潮社　三六九頁～三七三頁、新潮社)

(12)第六師団第六輜重連隊の連隊長服部政之助陸軍大佐が残した体験記「南海記念　ボーゲンビル島に於ける参戦随想」(防衛研究所図書館蔵)には、「二十一・兵は如何にして其の飢を凌いだか」とともに、「二十三・文明と人間の本質　六、ボ島土人と高砂族」という記述がある。

「六、ボ島土人と高砂族

高砂族は剽悍機敏なること「ボ」島土人の遥か上に在り。終戦前ボ島の背叛に方りて敵性土人を捕らふるに彼土人は「高砂が居るから駄目だもう逃げられぬ」とあきらめる程高砂は土人から恐れられている。敵性土人地帯を通過するにも高砂を護衛につれて行けば安全である。高砂は一二名で「大丈夫です。決して心配はありません」と太鼓判を捺して警備に任してくれる。彼等は密林内の争闘に於いて断して土人に引を取らない荊棘繁茂する密林内に野豚を追ふて撲殺するが如きは朝飯前だ。

彼等は言ふ「台湾だ、日本の学校が出来て蕃社からも子供が靴を穿いて学校へ行く様になるともうスッカリ弱くなって仕舞って駄目だ。高砂族としてはもう役に立たなくなる」と。味ふべき言葉である。」